

いずれにせよ石田英一郎が述べたように、民族学は「日本を破局に導いた侵略戦争のお先棒をかついだ戦犯の学問だという、拭いがたい印象を残した」ため、戦後になっていちじるしく魅力を失った (p.36)。そしてこのことも、ドイツ語圏に当てはまる。ポーフムのルール大学に勤めるディーター・ハラールが、その戦後ドイツ民族学史で提示したように、彼の地の民族学も第二次大戦後の再建に多大の時間と労力を要したのである [Haller 2012]。

ところで、ハラールと中生の著書の間には、興味深い類似がある。それはいずれも、先輩研究者たちのオーラル・ヒストリーを丁寧に収集し、それらを貴重な一次資料として用いていることだ。すなわちハラールは2007年から2011年にかけて、51人の民族学者にインタビューを行い、そのデータを利用したのみならず、面接の様子をウェブサイトで公開もしている [Haller 2012: 374-375]。他方の中生は1995年から2005年の間に20人の「応答者」から口頭で情報を得 (p.601)、その成果を本書の中で存分に活かした。こうした手法は、聞き書きを得意とする人類学であって、もっと試みられてしかるべきであろう。

最後に、本書のすぐれた点はまた、「事実の指摘が道徳的断罪にならないように……注意を払」うという歴史観に立脚していることだ。これは言い換えれば、どの時代にも学問的営為は、それぞれの時代の政治経済 (ポリティカル・エコノミー) と無関係たりえない、という警鐘とも受け取れる。たしかに戦時中の民族学者には、『国策』と自らの研究目標をうまくかみ合わせていたこと (p.416) もあっただろう。しかし現在の我々にとって、事情は多かれ少なかれ同じではないだろうか。我々もまた、将来の世代から評価され、批判され、あるいは無視される運命を背負っているという当然の事実を、改めて目を向けさせてくれるところにも、本書を一読する価値があるように、評者には思われてならない。

参考文献

Gingrich, Andre

2005 The German-Speaking Countries. Ruptures, Schools, and Nontraditions: Reassessing the History of Sociocultural Anthropology in Germany. In *One Discipline, Four Ways: British, German, French, and American Anthropology*. Fredrik Barth, Andre Gingrich, Robert Parkin and Sydel Silverman, pp.59-153. The University of Chicago Press.

Haller, Dieter

2012 *Die Suche nach dem Fremden: Geschichte der Ethnologie in der Bundesrepublik 1945-1990*. Campus Verlag.

瀬川昌久、川口幸大編

『<宗族>と中国社会——その変貌と人類学的研究の現在』

東京、風響社、2016年
311頁、2,500円 (+税)

川瀬 由高*

本書は、関東を中心に30年以上続けられてきた「仙人の会」のメンバーらの手による一連の出版企画のうちの一冊である。仙人の会は長らく他学問領域との交流のための「たまり場」を用意してきた研究会だといえ¹⁾、またある意味では中国研究者にとっての登竜門として目されてきた——評者自身、中国民族誌学を志した際、仙人の会への憧れもあって上京を決めた口の一人である。本書は、このような同組織の「老仙人」(古株たち)と若手研究者の二つの世代が集まり、中国漢族の社会組織や親族形態を捉える上で最も重視されてきたトピックスの一つである「宗族」を論じた最新の論文集である。本書は、これまでの宗族研究の到達点を示すとともに、あまりにも速くそして大きく変化しつつある中国社会を見つめる視座の一つとしての「宗族」の可能性と今後の展望を示した好書であるといえる。

本書の構成は以下の通りである。

序 (瀬川昌久)

第一章 宗族研究史展望——二〇世紀初頭の「家族主義」から二一世紀初頭の「宗族再生」まで (瀬川昌久)

第二章 「中国人研究者」の中国社会文化研究における宗族 (聶莉莉)

第三章 宗族制度と宗族組織——湖北省の事例 (秦兆雄)

第四章 社会的住所としての宗族——福建省客家社会における人物呼称の事例から (小林宏至)

第五章 現代中国に息づく親族組織——水上居民の祖先祭祀からの分析 (長沼さやか)

第六章 現代中国の「漁民」と宗族——広東省東部汕

*首都大学東京大学院 email: ychuanlai@gmail.com

尾の事例から (稲澤努)

第七章 現代中国における移民と宗族——福建省福州市の事例から (兼城糸絵)

第八章 宗族の形成、変遷そして現在——広東省珠江デルタの一宗族の事例から (川口幸大)

あとがき (瀬川昌久)

このうち、本書全体の枠組みと位置づけについては編者らによる序と第一章、第八章、あとがきにて示されている。それらを要約するならば、一方では親族・家族研究に属する「古典的で色あせたテーマに見えがち」(p.296)な研究対象でありながら、他方では20世紀末期から中国社会が経験してきた「社会環境や文化的理念のレベルにおける大きな変化」(p.16)に呼応するかたちで新たに再生／創出してきた極めて現代的現象だといえる宗族を、今日の人類学において研究する意義について検討するというものである。この点については本書後半にて述べることとし、まずは各論文について、評者が興味深く読んだ部分に特化するかたちで紹介していきたい。

第一章の瀬川論文は、宗族に関する人類学的研究のレビュー論文である。論文後半部では、1980年代半ばから中国南部を中心に起こった宗族の復興現象——祠堂の再建、族譜の再編、祖先祭祀儀礼の復活の「三点セット」(p.36)——と文化資源化についての研究動向を示した上で、同氏は自身の調査研究来歴を振り返り、宗族が日常的／非日常的文脈において異なる位相をもつという重要な指摘をしている。日常的な場面では、「宗族は決して人々の意識の中心を占めているような存在ではない。主として自分たちの歴史や出所に基づくアイデンティティーに関わる文脈において、自／他の境界を再確認する必要のある際に、人々が立ち返る観念的な存在」(p.47)であるのに対し、儀礼的・理念的場面では明確な輪郭をもつ宗族組織が立ち現れる。すなわち、前者における宗族は——都市／農村を問わず、地位や階層の別を問わず——具体的な組織を伴わない個人間関係の潜在的回路として存在しているのに対し、後者は、そのような父系出自関係の回路の上に立脚した上で、何らかの具体的集団表象を確立し得た者たちによってのみ形成されるものであるという(p.50)。これは同氏がかつて祭祀実践の領域に見出した、個人性／集団性の対比と中国の位階システムとの対応という論点〔瀬川 1987〕を、宗族研究においても展開したものだといえる。

第二章の轟論文は、日本の中国民族誌学においてネイティブの人類学者として活躍した最初の世代にあたる著者が、自身のこれまでの研究を回顧したものであ

る。同氏にとって、宗族は自らが埋め込まれていた社会的現実を客観的に捉え直すための方法論であったと同時に、中国の政治変動と社会変遷を見つめる上での分析視覚であったとしている。例えば、共産党政権のイデオロギーや階級闘争の展開によって宗族組織が瓦解した一方で、宗族的な秩序——「内／外」(異姓か同姓か)、「上／下」(輩行関係)、「遠／近」(分節所属の異同)——や価値体系が、共産党の公式的組織のなかでは変質しつつも持続していた。また例えば、日本軍による細菌戦被害地におけるペスト菌感染ルートの究明のため、そして被害影響の継続性を理解する上でも、宗族は重要な視点の一つであったという。被害状況の分布には、宗族成員間の紐帯がはっきりと反映していたからである。

一方、第三章の秦論文は、むしろ宗族を理解するための視点を深化させることに注力した論考となっている。同氏によれば、「宗族組織」とは宗族がとりうる一つの形態にすぎず、むしろ宗族の基本形態とは、組織を形成しない状態のまま、「宗族意識」(特定の祖先から分かれた男系出自の親族成員としての意識)をもち、「宗族制度」(宗族関係者が母方親族を区別し、父系を強調するような親族名称で呼び合い、輩行規定や内婚禁止などに従って行動すべきとする規範)に即して人々が生活するようなありようを指すのであり、これが、何らかの条件により宗族組織になることがあると捉えるべきだといえる。そしてその「条件」とは、これまで指摘されてきたような共有財産などではなく、むしろ、個々の有力者(経済的・学問的な成功者など)の諸活動ではないかと指摘している。同氏の議論は、父系出自集団のなかにあっても、個人々から見れば親類はキンドレットとして広がるものであるという素朴な事実を、宗族組織の動態を考える上での視点として提示したものだといえる。

第四章の小林論文が扱うのは、宗族組織やその儀礼活動などではなく、むしろ日常会話のなかに織り込まれた「宗族的状況」である。同氏の調査地では、男性のみならず、女性も婚入後、輩行(同族内の世代の序列)に基づいた名前で「呼称」されていた。即ち、現地では名前はただの固有名でただでなく、一族のなかでその人物がどの系譜のどの世代なのか分かる指標となっている(p.160)。ここで同氏は、各人の呼称(address)には指示(reference)が含まれており、そのために、お互いに名前を呼び合うコミュニケーションは父系出自的な関係性を想起させる「仕掛け」となっていると論じる。このように、初めて会った者同士でも、名前を聞く、呼ぶ(address)だけで、その配偶者や家系、ともすれば居住村までもがわかるとい

う現地の状況を踏まえ、名前とは宗族領域における自／他の位置を喚起させるような社会的住所 (social address) であると論じている。同氏は禁欲的に自らの調査事例にのみ使用を限定してはいるものの、この造語は輩行と呼称の社会的側面に光をあてるものであり、魅力的な視座を提示している。

第五章の長沼論文は、かつて水上居民と呼ばれていた、従来宗族組織をもたなかった人々による宗族「新興」の動きに焦点をあて、現地における手探りの祖先祭祀活動の様子について紹介している。その事例が示すのは、祖先や墓に関する記憶の混乱と、そのために生じている祭祀対象の矛盾であり、現地の人々の祖先祭祀の営みが、族譜を読み解き、直系の祖先を探りあてるまでには至っていないことである。そこから同氏は、彼らにとって重要なのは、祭祀の対象ではなく祭祀という行為それ自体であること、即ち、信念に忠実たること (orthodoxy) ではなく実践に忠実であること (orthopraxy) なのだ²⁾と指摘し、各分節を越えて行われはじめた祖先祭祀活動の意義とは、地域社会内部に自己を位置づけることだと結論している。

第六章の稲澤論文もまた、かつて水上居民であり、現在は陸上がりした「漁民」の人々による宗族「新興」の事例を検討している。しかし、祠堂建設や宗親会活動について分析した同氏は、彼らの活動は陸上漢族への同一化を意図して行われているとは言い難いと指摘し、その活動にはより実用的・実利的側面が見られることを強調する。例えば宗親会活動への寄付は、一族への貢献としてだけでなく、愛郷・愛国的行為としても讃えられる中国社会固有のイデオロギイがあるために、地域内での新たな社会的名声の獲得につながると指摘している。その上で同氏は、現在の調査地で宗族の有無がもたらす意味とは、陸上／水上漢族の対比ではなく、むしろ出稼ぎ労働者を文化的他者とするかたちで、自らを「祖先を大切にする、正しい行いをする者」だと再定位することであると指摘する。

第七章の兼城論文は、複数の姓が居住する村落における、在地住民らによる宗族の復興、および、他村から流入してきた新たな居住者らによる宗族の新興（及びそれが頓挫している現状）という事例を論じたものである。同氏は、J・ワトソン [1995] が『移民と宗族』で提起した知見を踏まえ、宗族の復興と新興の動きのいずれにも海外移住者からの資金還流ブームが大きな役割を果たしていたと指摘する。また、そのブームが過ぎ去り資金不足に直面している現在、旧住民らは祠堂の隣に新たに納骨堂を設けることで宗族成員の利害関心を引こうと試みていること、一方、共有財産や集団儀礼を欠いている新住民の側では、宗族新興を

試みる主アクターが自らの偉大な祖先たちとのつながりの確認作業という求心力探しを試みていることが報告されている。

第八章の川口論文は、広東省のとある宗族組織の形成—衰退—復元—復興へという時代的変遷を導き糸とし、宗族についての網羅的理解の提示を試みている。とりわけ、何らかの必要から選択される集団として、宗族で「なくとも良かった」／「なければならなかった」可能性の考察に、力点が置かれている。同氏の結論は、他のアソシエーション等ではなく、宗族という形式が選択されたのは、宗族が、現在および過去の間人間関係を同時に確定すると同時に、本質性を帯びた概念として構築されてきた出自概念の上に存立しているからだという。人々を関係づけるための便利な回路としての出自は、「国家の一体感や家族の相互扶助の促進という点では国家の、アイデンティティの充足という点では人々の希求をともにかなえる」(p.290) ものであり、それゆえに、宗族に代替されうる集合範疇は他にないと指摘する。

以上、各章について概観してきた。一冊の論集としての本書を理解する上でまず指摘すべきは、本書において「宗族」というキーワードは、調査年代も調査地も異なる各論者にとっての交流点として設けられているということである。即ち、本書は、何らかの単一的パラダイムに沿って宗族研究を展開しているわけでも、また、最も完全な「宗族」の定義を構築しようとしているわけでもない。それぞれの論者は実のところ、各々の民族誌事実に基づいて宗族を論じており、そのいずれもが、「宗族を理解するための視点」および「中国で生起する文化社会現象を理解するための宗族という視座」の双方に寄与するものとして準備されているのである。

しかし、それぞれの論者が異なる用語法を用いて記した各論考には、深く通底する視座もあった。評者の理解では、その一つが、宗族の顕在的側面と潜在的側面の区別である。即ち、前者は、「三点セット」、「宗族組織」、「大きなモニュメント」、「宗族という形式」などと記述されていたのに対し、後者は、「回路」、「宗族的秩序」、「宗族制度」、「宗族的状況」などと術語化されていた。両者の連続性を踏まえながらも、分析的にこの両者を区別したことは、単に「宗族がある／ない」という言い方が一面的理解に留まることを読者に喚起する点で、理論的貢献が認められるだろう。

では、本書が企図していた今日人類学への提言とは何であったか。編者らによれば、それは、近年「復活」してきた親族研究が着目する「親密圏」やサブスタンスの議論とは対称的な視座である。即ち、宗族の

研究は、親族関係が個人の私的領域に留まらず、国家や地域社会といった公的領域へと接続するという視座をもたらすという。なぜならば、「中国人社会に生きる個人にとって、個人の私的世界の外側にはそれと対置される公共空間がいきなり広がっている訳ではなく、そこには何重にも折り重なった相対的な『公』の空間がある」(p.298)からであり、また、系譜意識とは歴史を遡及する性格をもつものであるために、宗族は「個人を中華民族の全体史へと結びつける経路」(p.299)ともなっているからである。この視座が中国研究を超えても理論的可能性については読者の判断を待つしかないが、評者自身は、宗族研究は親族研究のみならず、個人-集団関係論や中間集団論、あるいはナショナリズムと家族のメタファーの親和性といったトピックスにも寄与しうるのではないかと感じた。

なお、論集のなかで稲澤も述べているように、宗族研究への過度な傾倒は批判もされてきた (p.202)。つまり、宗族はあくまで中国を理解する上での一つの視点でしかない。また、親族研究における現在の理論的潮流とはそぐわないかもしれない [cf. 賈 2017]。だが同時に、宗族は中国の社会動態を理解する上で依然として重要な視座の一つであるように思われる。例えば、評者の調査地である南京市郊外の農村地帯 (高淳区) においては、1980年代以降に真っ先に復興されたのは主に民間信仰に纏わる施設や組織 (祠山大帝という神を祀る祠山廟や祠山廟会) であり、宗族組織ではなかった。しかし、2010年代に入る頃から、民間信仰方面の復興が「一段落」したかのように、今度は同エリア全域で、祠堂の再建や族譜の再編といった現象が目立ち始めている。中国の華東地方 (上海市、江蘇省、浙江省を含む長江デルタ地帯) は従来、宗族組織が未発達な地域だとされてきたが、それにもかかわらず、同地でも「宗族という形式」が次の投資先として選好されている。宗族復興運動は、同時代中国の各地でたしかに「社会的リアリティ」(p.1) をもつ力学であり、やはり等閑視することはできない社会現象なのである。

中国における宗族とは、「親族イデオロギーや親族組織自体の再生、再活性化、再解釈という現象」[瀬川 2004: 4] を考えるに適した事例であり、また、同時代に生起する、「われわれ」をめぐる自己再定位運動の一例でもある。本書には手軽に引用できるような「理論」はないかもしれないが、上述したように、各章ですぐれて理論的な記述が展開されており、これらの問題に取り組む読者にとっても得るものは大きいだろう。長きにわたる宗族研究史の継承と新たな研究視点の付与という本書の挑戦は、中国民族誌家のみな

らず、他分野の中国研究者、そして、人類学者一般にとっても、読み応えのあるものとなっている筈である。

注

- 1) 2011年7月10日、武蔵大学にて「仙人の会30周年記念シンポジウム」が行われたが、その趣旨文には次のように記されている。「仙人の会は、1981年に、当時在京の諸大学において人類学を中心に、歴史学、民俗学、文学、考古学、言語学、人文地理学等の分野から新たな中国研究を目指していた大学院生たちによって結成されました。以来、所属大学や研究分野を超え、緩やかに熱い研究討論の場として、日本の中国研究の中に一定の足跡を印してきました」(仙人の会メーリングリストにて配信された案内文より抜粋)。
- 2) ギャツは、パリの宗教を性格づける際にオーソドキシシー/オーソプラキシシーの対比を使用した [Geertz 1973: 177]、中国民族誌学ではこの対概念は特有のニュアンスをもつ。即ち、中国における観念領域の多様性と儀礼実践の全中国的画一性を論じた J・ワトソン [2006] の葬儀論以降、オーソプラキシシー概念はしばしば「中国人であること」(Chineseness) を論じる文脈のなかで用いられてきた [cf. Bruckermann and Feuchtwang 2016: 198-200]。

参考文献

賈 玉龍

- 2017 「書評 瀬川昌久・川口幸大編『<宗族>と中国社会——その変貌と人類学的研究の現在』、風響社、2016年」『年報人間科学』38: 69-73。

瀬川 昌久

- 1987 「香港新界の漢人村落と神祇祭祀」『民族学研究』52 (3): 181-198。
- 2004 『中国社会の人類学——親族・家族からの展望』世界思想社。

ワトソン、ジェームズ

- 1995 『移民と宗族——香港とロンドンの文氏一族』瀬川昌久訳、阿吽社。
- 2006 「中国の葬儀の構造——基本の型・儀式の手順・実施の優位」西脇常記訳、『中国文化人類学リーディングス』瀬川昌久、西澤治彦 (編)、pp.261-278、風響社。

Bruckermann, Charlotte and Stephan Feuchtwang

- 2016 *The Anthropology of China: China as Ethnographic and Theoretical Critique*. Imperial College Press.

檜山哲哉、藤原潤子編
『シベリア——温暖化する極北の水環境と社会』

京都、京都大学学術出版会、2015年
511頁、6,500円（+税）

林 直孝*

本書は、シベリア、特にサハ共和国を中心とした東シベリアで起きている気候変動の実態とメカニズム、そして気候が変わると動物界、植物界、そして人間社会にどのような影響を及ぼしているのかを解説、議論したものである。総勢31人の自然科学者、人文・社会科学者たちによって執筆された13章、13コラムから構成される。とりわけ水循環（河川の流量、土壌水、降雨や降雪）に焦点を当て、自然と人の生活の関係を探る。永久凍土やその上に広がる（土壌水の）活動層の縮小は、草木の成長に悪影響を及ぼし（1、2章、コラム2、3、4、5、6）、冬の降水（本来ならば冬には降雪）はトナカイの飢餓を引き起こし（3、11章）、洪水後に長引く湛水（洪水後、水が長い時間留まって引かない状態）は村の存続にかかわる（6、12章）。特に河川は、人々の生業、移動、居住の場として重要な生活の場だ。水循環の変化は河とともに生きる人々に大きな影響を与える。気候変動の研究とえば、これまで自然科学者による研究のみに終始してただけに、自然科学研究と人文・社会科学の領域をつなげた本プロジェクトは、注目に値する。野生トナカイの管理と狩猟を巡る問題は、トナカイ個体群の密度推定と文化的活動の維持、発展という問題が絡み、生態学と人類学の共同研究の良い例だ（狩猟活動を考慮に入れたトナカイ管理案の提示（p.79）、11章、コラム11、13）。評者も、現在、北極域研究推進プロジェクト（Arctic Challenge for Sustainability, ArCS）の中で、自然科学者と一緒に、気候変動がグリーンランドの人々の生活に与える影響を調査しており、本書から多くのことを学んだ。

北極圏は気候変動の影響をもっとも顕著に受ける地域だと言われている。その影響は世界各地に及ぶ。冬季に日本を襲う強烈な寒波は、北極海の海水の減少と

関連があると言われ、世界各地で起きている最近の異常気象も北極圏における環境変化が、大気や水の複雑な循環経路を経て、引き起こされていると考えられている [Sato et al. 2017]。本書によれば、シベリアの気候は、高温・湿潤化（夏の降水量と冬の積雪量の増加）している（1章、コラム1、3）。それは、北極海の海水減少に伴い、大気中に大量に取り込まれた水分が大陸にもたらされるからだという。

北極圏の気候変動が世界に及ぼす影響は、環境異変の問題に留まらない。北極圏には、石油や天然ガス、鉱物などの資源が大量に残っていると考えられている。温暖化とともにこうした資源は採掘可能となるため、気候変動は政治・経済問題に発展する（コラム12）。かつては、北極圏と言えば、辺境の地であり、科学の場でも社会科学の場でも注目を集めなかったが、ここに来て、北極圏は、自然科学、社会科学の表舞台へと引き上げられた。

2000年代半ばから、人間社会の気候変動への「適応」は重要な研究テーマとなった。気候変動が単なる歴史的な自然のサイクルなのか、それとも人為によるものであるのか、いまだに政治の場では議論があるが、世界各地で気象異変が起きているのは事実である。大事なのは、今後、私たち人類は気候変動に対処できるのかということである。例えば、2005年に発表されたArctic Climate Impact Assessment (ACIA) は、気候変動が起こる仕組みを解説するだけでなく、それまでの研究から得られた知見をもとに、北極圏に住む先住民たちの生業や生活にどう影響を及ぼしているのか、そして彼らがどう対応しているのかについて数章を割いている [Symon et al. (eds.) 2005]。つまり、気候変動の人文的な側面 (the human dimension/a social aspect) を重要な問題として取り扱った。

人文・社会の分野でも気候変動を研究する動きは2000年以前にもあったが、その分野を牽引していたのは、人類学者ではなく、人文地理学者、それも自然災害対策を研究 (natural disaster research) する研究者たちだった。これは、気候変動に関する政府間パネル (The Intergovernmental Panel on Climate Change, IPCC) の第二作業部会 (Working Group II) が作成する報告書の執筆陣を見てもわかる。彼らはモデルを作り、環境に変動をもたらす環境変動因子 (stress/stressor) がどのように社会に影響を及ぼすのか解明し、被害を予測しようと試みた。そこで明らかになったのは、二つの地域に同じような環境変動が起きたとしても、必ずしも同程度の被害をもたらすことはないということである。自然現象が災害になるかならないかは人間が決めることである。レナ川沿いに点在する

*カルガリー大学 email: naotaka.hayashi@ucalgary.ca